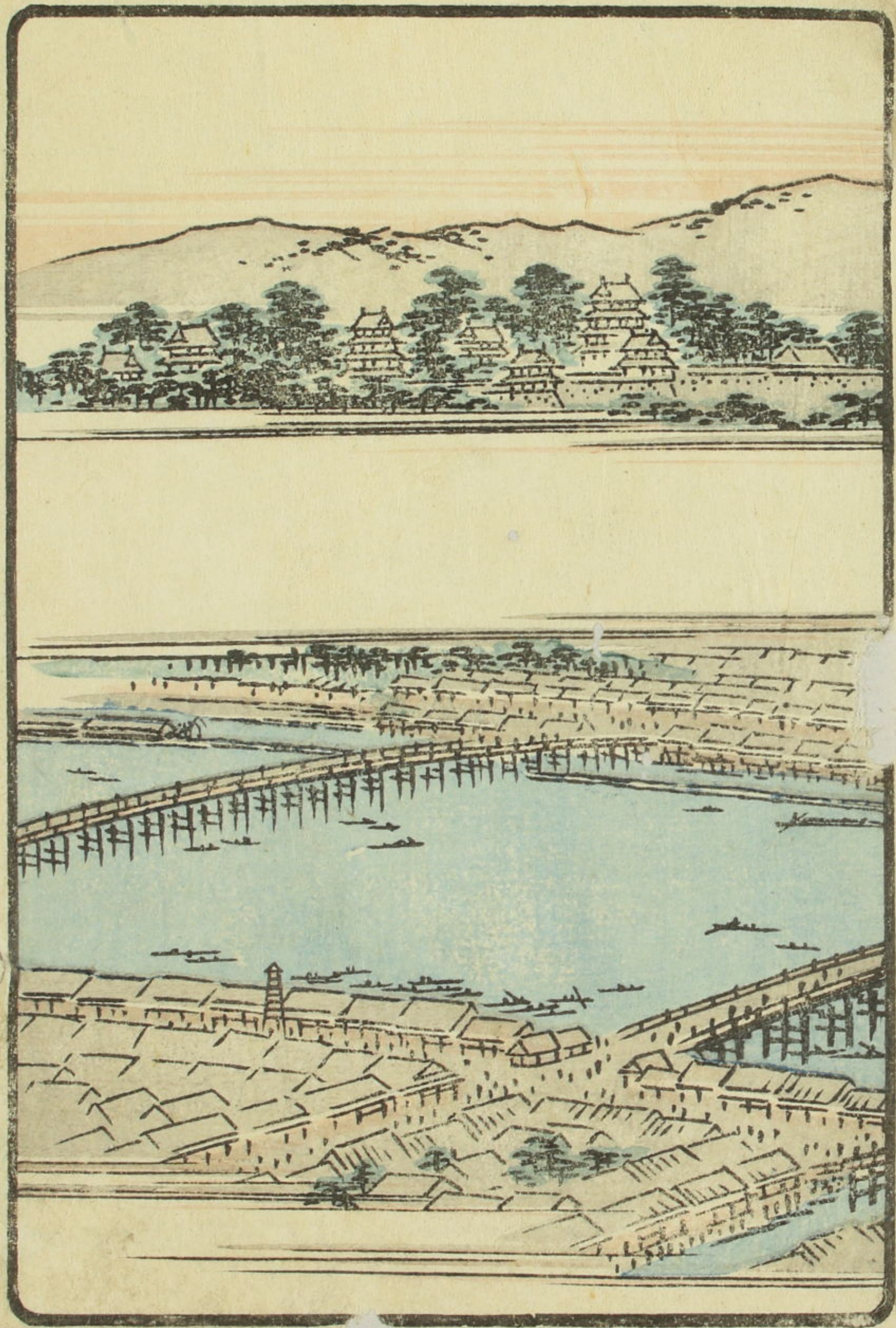


むろ社むろ派ハ連ニ因ハ今ノといハれハ多シ矣。六ノ八ノ京ノ師ニ
 携ヒる。考トる。意トる。ぬ。整レ昌ク其ノ形ニ状ニ也。強クに
 一ノ一ノ勢ト其ノ所以ヲ知スもトす。其ノ表
 大阪ノ其ノ名ノ際ヲ以テ次ニ此ノ妙ニ持テ思ハふ。也。
 龜井ノ漲ル乾ク天ノ王ト奪ル春ノ其ノ勢トの操ヲ字。
 秋乃夕ニ其ノ賦ト山ノ海ニ也。送ル家ノかたかキの
 道標を。周ノ長ト忠ニ報スより。終ルあハ法ト其ノ



〇
 四ノ一



翁の筆次さび哉。はるこれ終焉乃
 翁とわいぢくこれ小過る家づと
 あらと。彼此人の観やいさめ
 ぬ

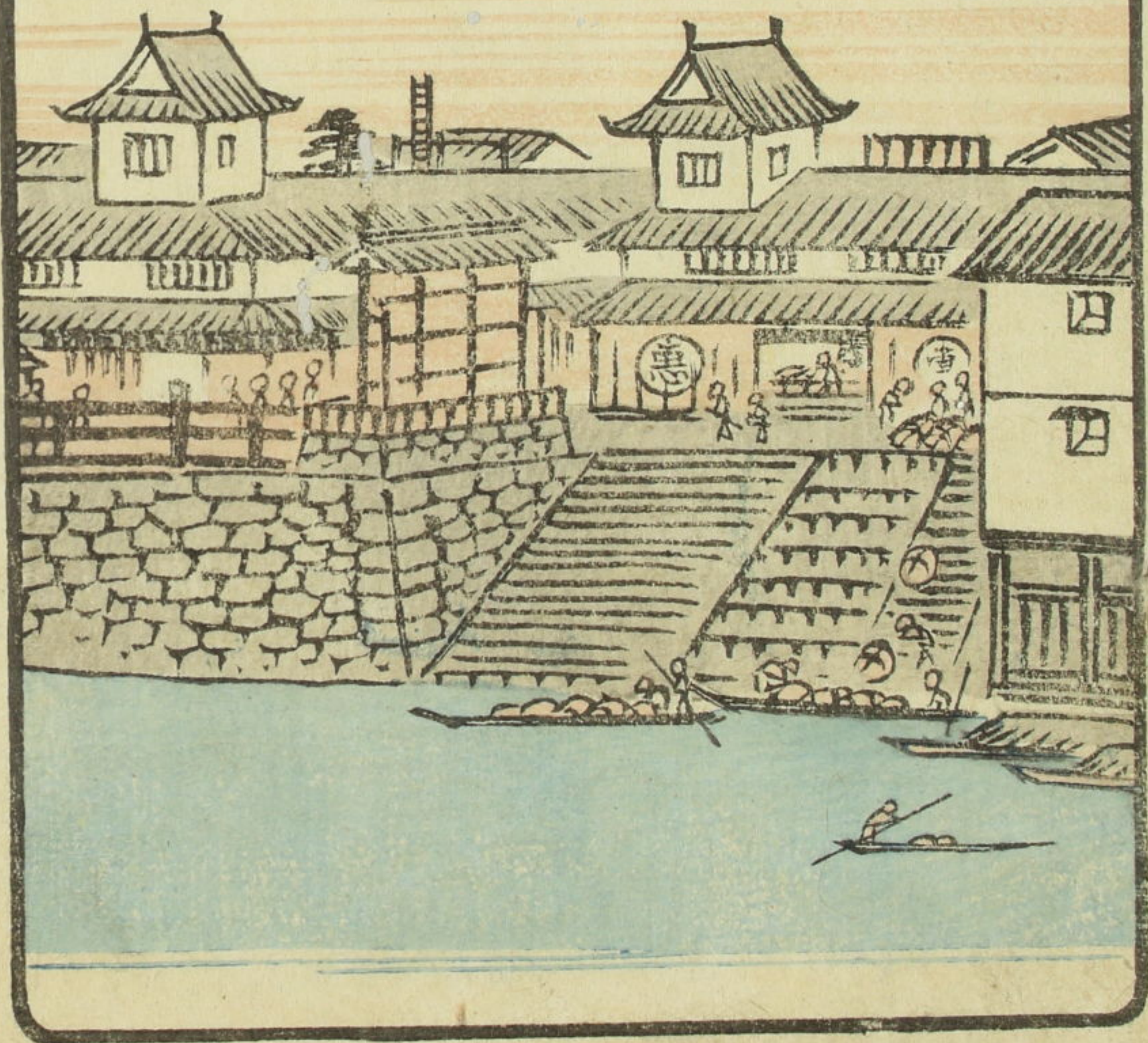
嘉永四年む川ま

伊形太 山川正宣後



高麗橋

當橋詰の左右小城郭小
 ひりれ矢倉のり号けり
 矢倉屋敷といふ又隈を
 平野町の角あもかろてり
 櫓り浪花市中の寺観
 さて恵比須屋の呉服店と
 あり玉露堂の園扇店
 岩城三井の呉服店虎屋
 伊織の菓子店其外種々の
 高家軒とて交易の眼
 まくぬく賑々此地西の



西横堀北の大川南の長浜
 東の岩川と隈
 凡て船場と稱す

舟を乃

とらふふ

多々

うきりや

舟丸



高麗橋 東堀より三の堀川まで十三橋の内川上 凡そ大坂よりして諸方

小至る行程の里数と此橋よりして定むる成例といふは此川と

東堀と号し是より東と上町といふ西と船場と称す此橋の

上るると今橋と号し此橋條の船場は方と俗に肉町と

号し名小間へる富家豪家軒と烈ぬ又は辺より北戎

小浜といふ此は金相場とて母は市中の両替屋ゆかり金

の賣買とほし相庭と立て金の價と定む是は堂島ふ於て米

の價と定るるは是にして又浪花の一奇といふべし

神明宮 高麗橋東詰より東南 俗に平野町神明と云所祭三坐

中央天照皇太神左八幡宮右春日明神例祭六月十六日

九月十六日より毎月一六の夜系訪群とるは是より

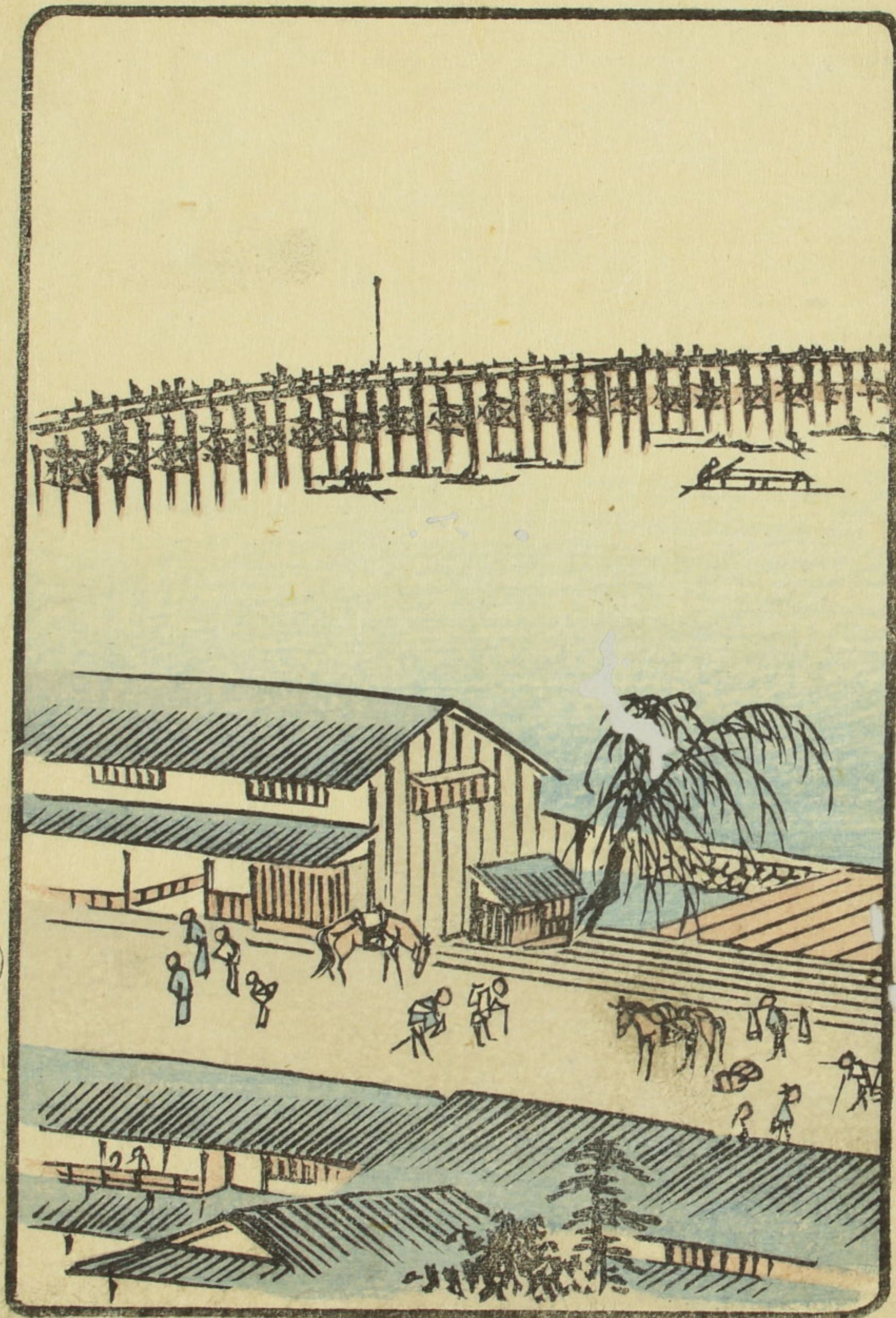
諸賈夜店と出づ賑ぐ事夥し

天神橋 淀川より大川系架せり川上より第二の大橋之長サ百三十二間三尺

當橋の南詰より東に至るは八軒家の船着ありて京師への

通船朝夕よ出入ありて最賑なり所謂三十石の秋船並船今

井舟の朝船ありれば下の客小支度進る舟船上客集る



二二



八軒家

天神橋

神元

天満菜蔬市

此市場の日々朝菜
 数々の商人あまた
 菜蔬と買買とて恰
 も遊の海がどじこれ
 知汝の若菜より幸の
 昔の葉は服ふや
 中では幸のりん
 了め別て秋の松茸
 栗の干の密掛市
 夜の市やてねむれど



教多照し〜

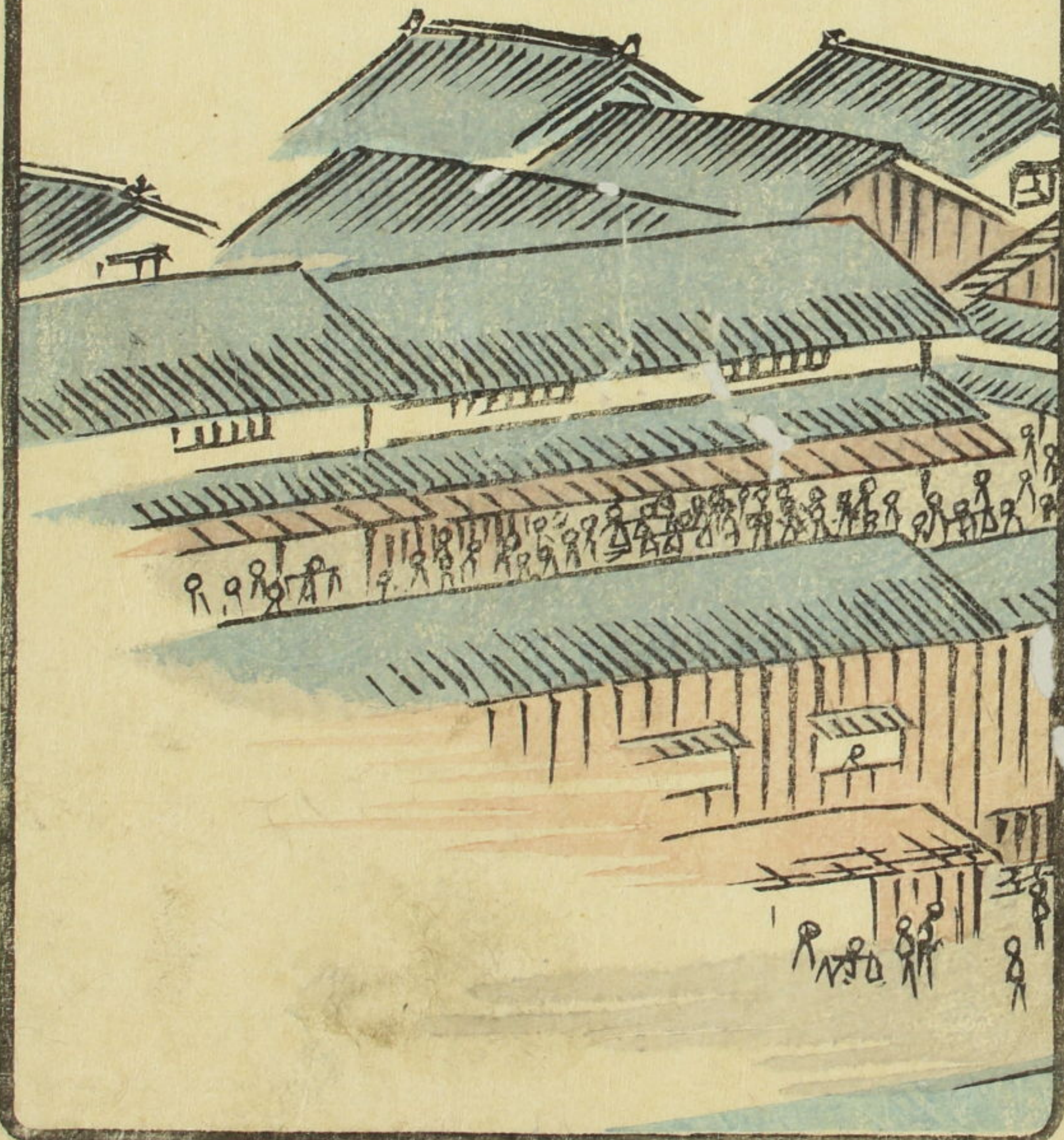
月多るんちせ〜

市中に

海り〜

や〜

今朝名
 醒花



船次陸下荷着る馬子。何う声高小罵るあれば。船主は切の
扱きと口角衆あつて。終日静なる事あり。ハ。蟹昌の證
とつてし。古名を十日宿といひていづかしの舟着あり天和
國版の大坂の界も十日宿八けんやとあり

座摩宮舊趾ハ朝家の上石河の辺より例年六月二十二日座摩神社

夏後の神事の時神輿以所は渡御あり。往古は地小鎮座ありしが
後世今の地へ遷せしとて今尚御鎮座石と云ふあり。此石は
故小石町の名ありと云俗は座摩の所旅所と称し

菜蔬市場天神橋北橋より車へ渡例通三丁をぐるの回あり原此市場へ

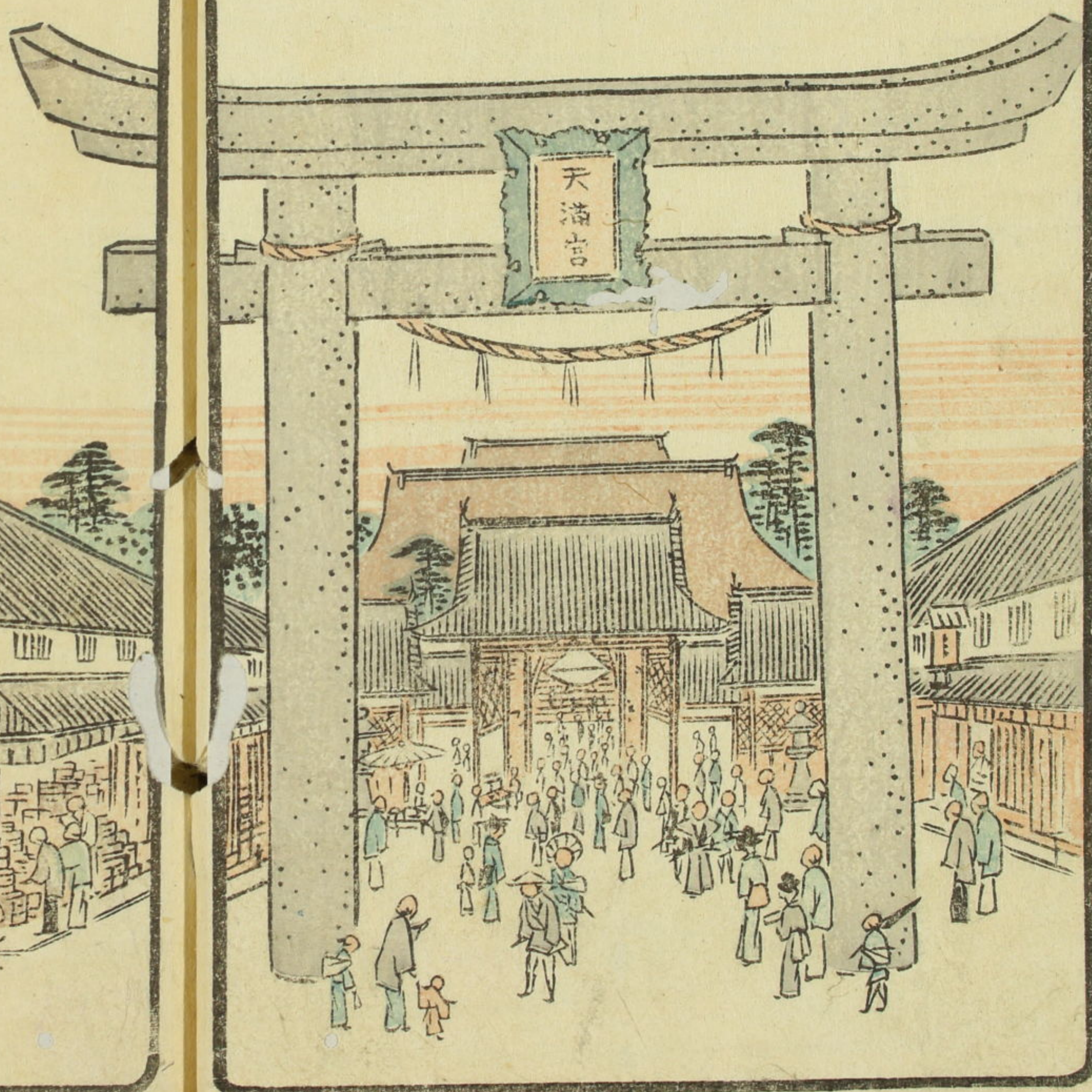
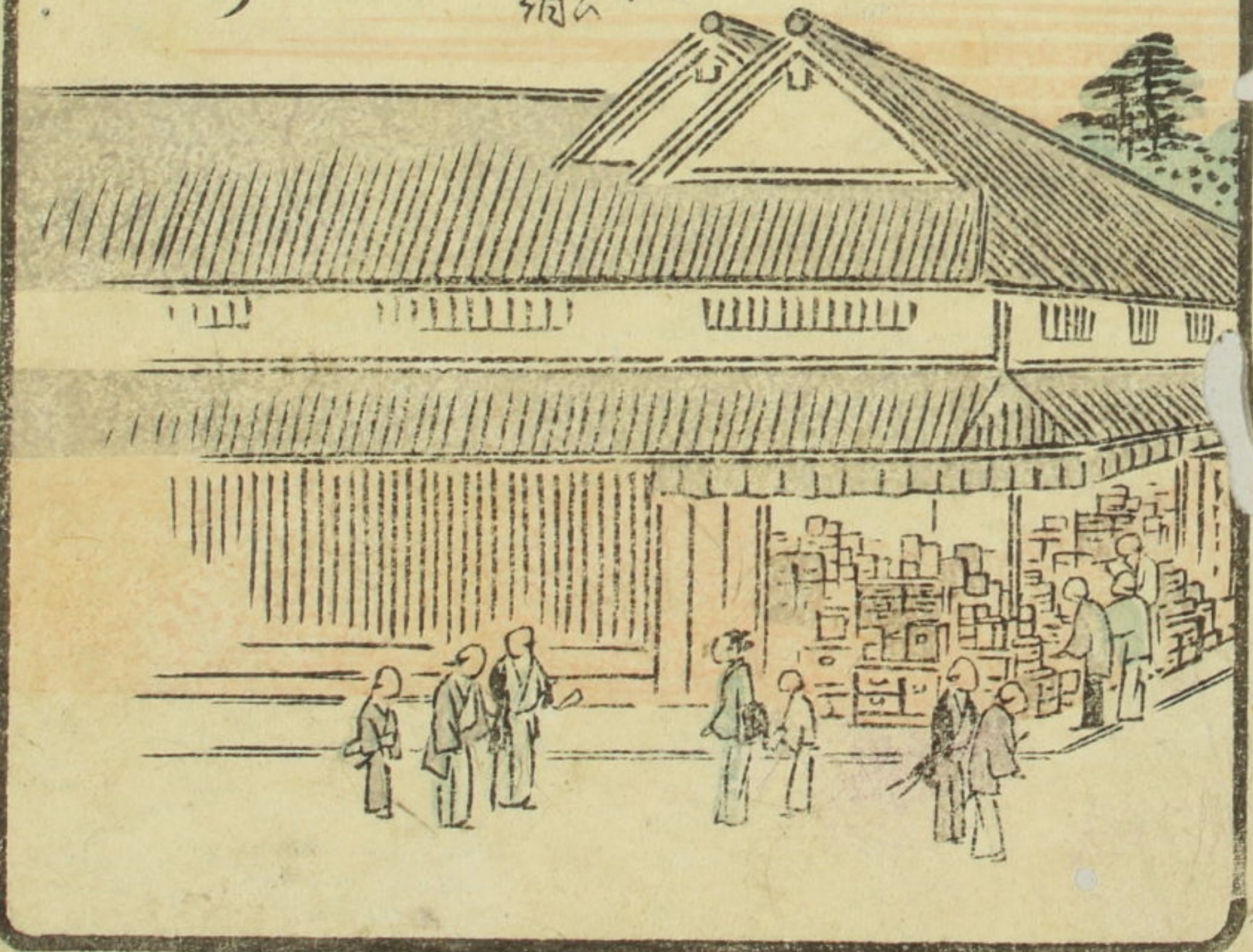
京橋南橋小橋より年々く育るが慶安の頃其地御園地
とありて京橋河原町へ引移り然るに商人の往來小橋へ
ありとて替地と免され今の所へ移りしより日々小店と
飾り賣買市人鳥の如く小集ひ餅の如く小萃を賑とせ
事。常小なむし事なり

天満天神社天神橋通より二丁東の條正面あり此地と天満と号する

事ハ天満大自在天神鎮座より故あり。所奈本社中央より
大自在天神相殿の東より手力雄命法性坊尊意西より猿田彦

天満天神

菅神の聖廟多々存中別て當社の
 他は起て冥験ありたる事より遠近の
 貴殿常小詣して向断りて頭の繁
 栄浪花第一とて正月七日例月廿
 群をり就中正月の初天神とて
 詣人往來の道に満ち錐や立り此
 寸地を實に初夜に大級日なり



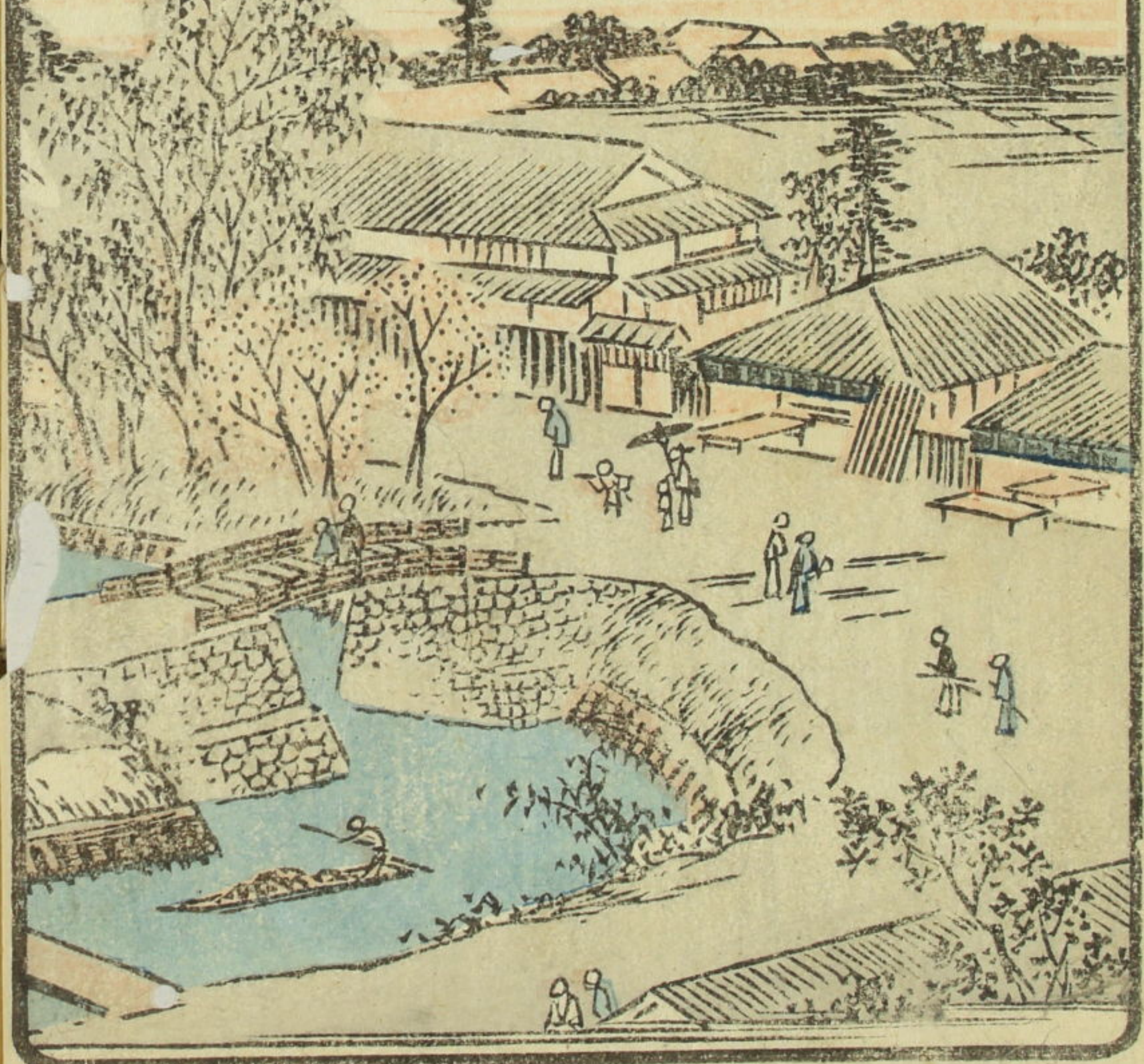
初

大神（ひらき）鯉兒尊（いりご）亦（また）有（あり）其（その）余（あま）境内（かみ）小末社（せま）多（おほ）畧（りやく）之（の）地（ち）往（ゆ）昔（むかし）
 北西小瀆（きたにしのく）松原（まつがら）有（あり）り（り）が入皇（いりみ）六十二代（むむにじふにだい）村上天皇（むらむらみ）天曆（あまのり）年間（あまのとし）
 神託（かみ）小（せ）かセ勅（あまのさし）願（ねが）ひつゝ建（た）辛（しん）給（たま）ふ所（ところ）ありとて故（ゆゑ）小天神（せみかみ）の
 松原（まつがら）或（ある）天（あま）林（はやし）の森（もり）有（あり）り古書（ふるしよ）小見（せみ）へりり程（ほど）小靈（せみ）験（げん）ひつゝ
 有（あり）り（り）が四時（よじ）二時（にじ）二時（にじ）人（ひと）回（まわ）り（り）遠（とほ）近（ぢか）より難（むづか）集（み）へ（へ）社（やしろ）内（うち）人（ひと）昔（むかし）常（とこ）
 或（ある）軍（い）書（しよ）講（かう）釈（しやく）の小屋（こや）地（ち）上（かみ）へ（へ）紋（い）中（ちゆう）降（くだ）品（しん）玉（ぎよ）輕（かろ）業（わざ）は藝（ぎ）時（とき）は
 唱（な）哥（か）の讀（よ）賣（う）其（その）余（あま）菓子（かし）類（るい）手（て）遊（あそ）具（ぐ）の出（い）店（てん）有（あり）り地（ち）せ（せ）と（と）ま（ま）で
 烈（はげ）つて朝（あ）暮（くれ）の蟹（かに）思（おも）つ（つ）人（ひと）方（かた）は門（かど）亦（また）有（あり）り其（その）食（た）家（か）者（しよ）賣（う）店（てん）鮎（あ）屋（や）饅（まん）

頭（かぶ）末（すえ）菓（くわ）賣（う）珍（ちん）器（き）奇（き）妙（めう）の商家（け）軒（けん）と有（あり）り（り）と数（かず）販（はん）び（び）て饒（にぎ）り（り）と（と）ま（ま）で
 皆（みな）菅（す）神（かみ）の余（あま）光（ひかり）とつゞべし例（れい）祭（まつり）六月（むむに）廿五日（にじふご）の鉾（こ）流（なが）し（し）の神（かみ）芝（しば）
 と（と）ま（ま）で神（かみ）夷（ひ）戎（えい）島（しま）の行（ゆ）宮（みや）小渡（せ）御（み）あり其（その）壯（さ）觀（くわん）の美（み）景（けい）有（あり）り
 事（こと）ハ世（よ）の普（ふ）く見（み）所（ところ）有（あり）り浪（な）花（はな）第一（だいいち）の賑（にぎ）ひ（ひ）有（あり）り
 菅原山（すがらやま）天（あま）滿（み）寺（でら）天神（あまのかみ）の社（やしろ）地（ち）のゆ（ゆ）あり天（あま）滿（み）寺（でら）と有（あり）り境内（かみ）小天（せみ）滿（み）官（くわん）と
 鎮（ちん）系（けい）以（も）相（あ）傳（た）ふ菅（す）神（かみ）影（かげ）向（むか）の時（とき）もあ（あ）り此（こゝ）小（せみ）龍（りゆう）を（を）居（ゐ）は（は）し（し）に
 とつ（と）ま（ま）で神（かみ）像（ざう）長（なが）七（しち）寸（すん）がかり殊（こと）勝（しょう）と有（あり）り
 惠（めぐ）美（み）須（す）社（やしろ）寺（でら）所（ところ）の西（にし）寺（でら）所（ところ）橋（はし）の西（にし）傍（わら）あり所（ところ）祭（まつり）蛭（むし）子（こ）尊（のみこと）左（ひだり）少（す）彦（ひこ）名（な）

堀川

當川條の旧の戎の社より凡
 二丁余まで堀田より程一里の
 辺に草葦とて積り積り積り
 山のてくする故小塔あり
 号はしん昔の地あり
 是より東へ淀川とて
 新子穴鑿りてせられより
 大河の清水通下其流は
 繁く樹の橋の本と地
 つれ且通航のまゝなる
 中二流の坂より遠くの



社
 二

老若あつて集ひ發人
 聖宮お群て幽籠と
 賞以

實其始と知る

ののれ其所より
 或と懸ふむりの
 景地とあり



命右太玉命三座あり

女夫池旧趾 十丁目とていふ一説小此地は始池ありて朝来池

と称するが後世其側より又一の池と掘て双と成り

より土人女夫池と言ふるをせりとて 攝陽群談小異説ありとも畧之

然るに近來堀川條と新鑿ありて淀川は流と通

むらふより女夫池町は橋と架して女夫橋といひ池は

埋むる平地となりおふ能勢侯の邸と建られ門

内の傍小妙見尊と勸請あり是は摂別野間村妙見

山の本尊同躰の靈像小まゝおせり懸懸とて新るれば

貴賤常に詣して同割る別る午の日の御縁日也

とて系諸縣し

木村堤 河ハの渡場より川上の方より 此地は淀川とて西岸やと堀川は

通る流水の樋口あり是よりして下の川原より橋の並樹

ありて弥生の花盛る老若の遊覧して孰と傾け破子と

角を寄よみ詩と作り今様と諷ひく最ふをり殊更は堤

を橋の宮小對したる東の岸も爛熳する花の景色淀川は

雀満寺

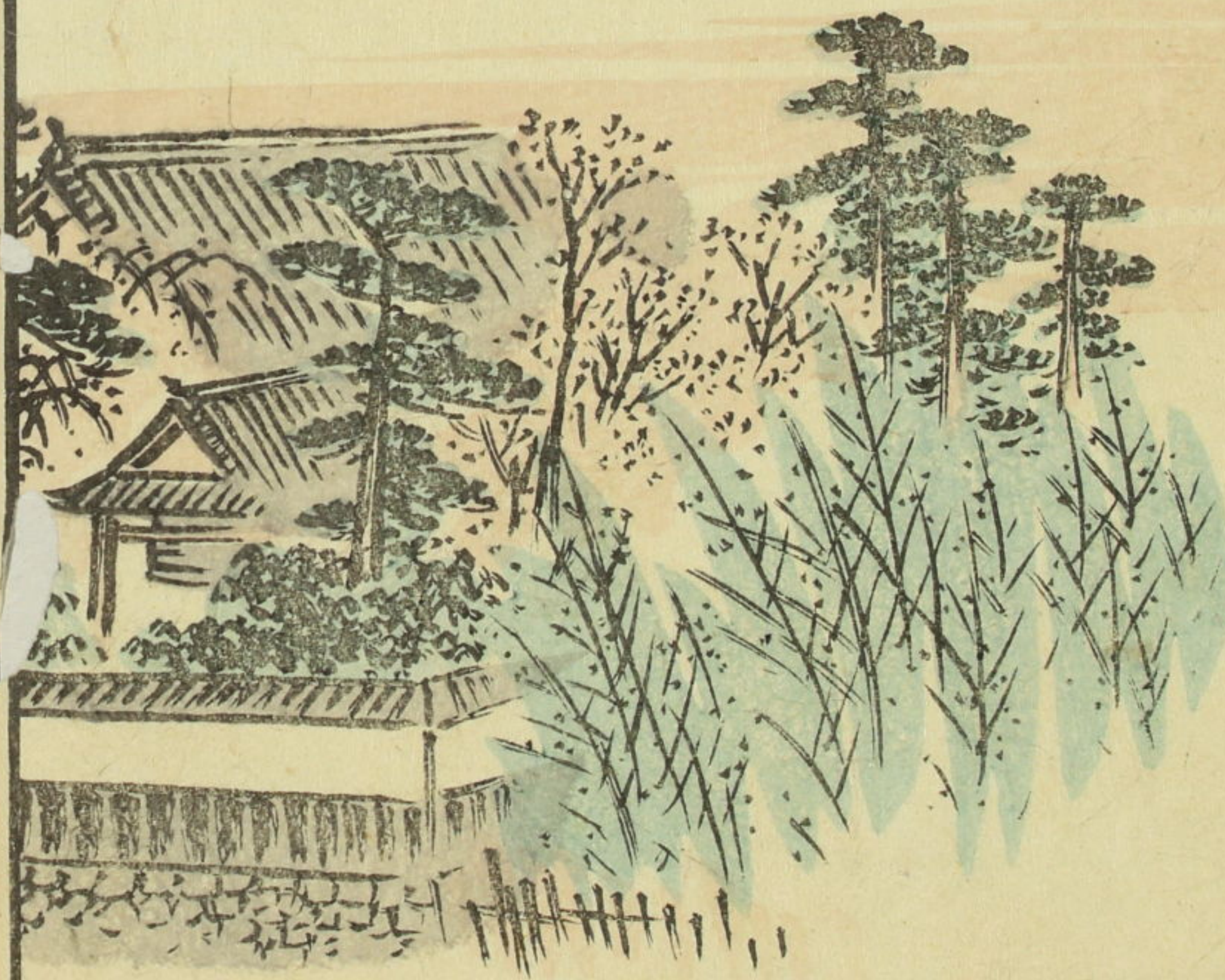
天海十丁目と
少あり南長柄と

當寺の梵鐘ハ

長州侯よりの奇附あり

原の唐土の器あり 銚銘云

大平十年二月 云云



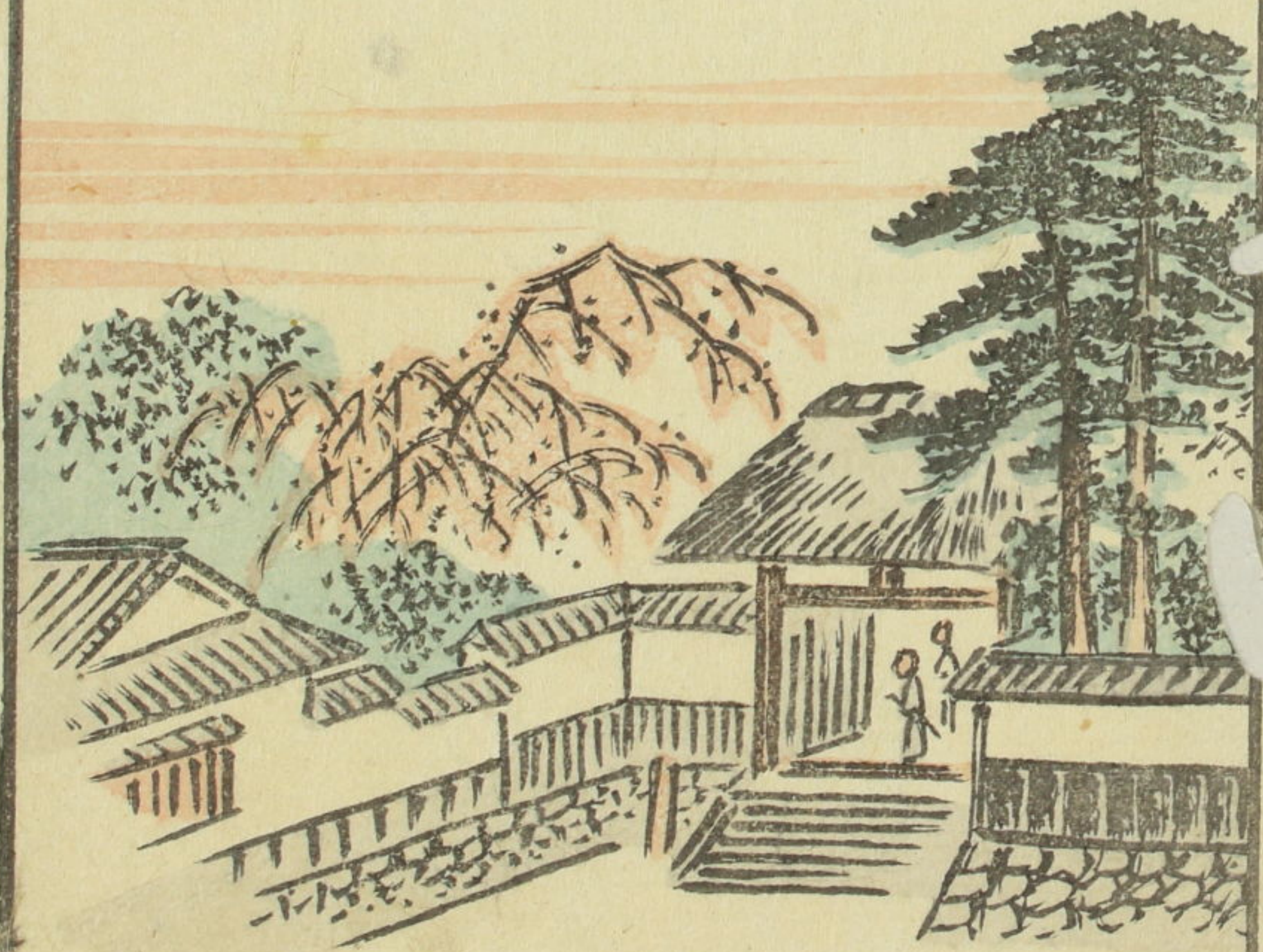
初

又境内に大樹ありて花の盛なり
幽篁ありて猿人暮る
おむれて風流なるあり

中〜小庵

つ〜小庵

柳亭 翠鶯



初

流るに映り吉野嵐山も余可きづば豊由

川寄御宮 天満川寄あり 國花集云元和年中松平下慈守

匡清彦創建し三江和尚寺勢一建國寺と号し禪

宗洛陽建仁寺に属しト云 御例系四月十七日皆自難人の

系諸と許しし御本殿の莊嚴結構る申も恐るはり

御境内小觀音堂藥師堂能舞臺あり社頭より榎樹数株

あり花の頃ハ珠更小美觀あり

天満橋 御宮の西の傍は南あり 淀の大川筋又餘川古大和川平野

川橋間川ホ合流して其小落合橋長と百十五間五尺と云

往古此南の岸の傍と大和の岸といひ此由橋と天神橋は

間も橋と架して大和の橋といひ或ハ渡辺の橋とも号し

のつとも其時ハ川幅廣くして貳百六十間余ありとぞ

京橋 天満をけ有法と云ふなり川橋をねの下といふ 故大和川橋間

川舎流して橋下より大川入南ハ金城ありて登城の御橋

る欄檻葱宝珠の銘ニ云元和九年造立と鐫り此後より

東ハ斤原町相生町とて京師往還の街道あり

京橋

此橋は水落ふおのり
朝毎に川奥の

市あり

鯉 鮒 鰻 鱈 鮎 泥鰌

鱈とともり河湖のあしゆ

魚と持より交易ありま

最にざり

松中整と以て市の

終とるん

遅く来りて市にさるり

者と困魚の間あも合ぬと

いひより世は常言ふ

事ふおられて間よ

合がゆふ

なほ言ふ

せり

金城の春小

輝多市は魚

八千房

其山



金城

京橋の南方あり大手御門ハ西面ありて東堀ありて思業橋より之故一海通と大手と号し南と西道は東と西を以て京橋と号す

攝陽群談云金城ハ東生郡大坂王造岸小あり云金

七寶の初土中不朽は火も焼くは能くは固く以て世依

合と祝し奉る云城郭の結構守護の厳重ハ申す

恐と多し城外の風景も更に美觀なり二月初午の日ハ

貴族老若群集し遊宴に尚空しく不雲雀さへは

頃ハ小まつて飲樂する日くやと賑はる事いと不

太平の御恩澤仰ぐべし尊ぶべし

網島

糸島の北端ありて北地ハ淀川の堤ありて後家烈王宮ハ此

処焉小細と于史那ハ号け知らるるし前ハ淀川の流

繁く難波津の通船釣船細舟遊具の屋形船と生来

眺む東ハ生駒掠が嶺志貴昔城二上嶽昔見へり

四時より夕景あり故小富家の別宅雅人の閑居風流

貨食家ありて頗る遊樂の雅地といふべし

大長寺

右同前小あり境内小鯉塚鯉紀あり付物小鯉の奇鱗

あり是より北へ堤づゝひよて極宮小つゝて凡三町許あり

櫻宮

櫻の宮は淀川の東の
岸小あつて社頭はひも
ささり水辺より鳥場
の境はつるまで一園の
桜して緑生の並よ
雲と見雪と染ふ
光景西の岸は川岸
堤よりゆふつささ
堀川の樋の口まじく
ゆも桜の並ふをまじ



川とささりても岸の花
爛漫とて水小映り川風
花香を送りて四方小渡都
とりさる程は都下のまじ
老若陸とあそび舟と通ひ
て親ふり并ふあつて後日
遊宴を宴は流花に於て
花見の勝地といふべし



初七

鴨野辨天祠鴨野の全山の長あり 京橋の南筋鐵御門と東へ
 ぬけ鴨野橋と渡りて糸結の靈驗ありて諸願成
 就とて後人常に問新し 別々月毎の己好日云老義
 群奉とて初念と凝ひこれと信ふ已攝法といふ其秘を
 おのゝ異うとて忠あり孝あり又の病苦の平愈と祈るあり
 或は初欲色欲ありて得て傍より於懸ふ神も困らせり
 又此祠より東の方左専道の不動のへ五後藤
 山友三寺と号し本尊不動明王の御利益掲焉とて日毎

鴨野辨天祠鴨野の全山の長あり 京橋の南筋鐵御門と東へ
 ぬけ鴨野橋と渡りて糸結の靈驗ありて諸願成
 就とて後人常に問新し 別々月毎の己好日云老義
 群奉とて初念と凝ひこれと信ふ已攝法といふ其秘を
 おのゝ異うとて忠あり孝あり又の病苦の平愈と祈るあり
 或は初欲色欲ありて得て傍より於懸ふ神も困らせり
 又此祠より東の方左専道の不動のへ五後藤
 山友三寺と号し本尊不動明王の御利益掲焉とて日毎

糸箔絶び珠更正月廿八日の初不動とて群集せり

猫間川 金成の東より平野川と合流して鴨津橋の下と通じ 後世此川條うづのれ通船自

由るうづりしが去天保八九の年回 御仁惠ふつ川幅を

度らく底深く溝へめりふつ船の往返ふのすくやして

便宜なるそ甚しう程は舟流小松を架し居る新小家

作し或は花紅葉の樹榊棠芳萱の類を植て春秋は美

観とて又此傍小朝日菴とつてありて清正公と銘あり

御利生新とるうづ糸箔

森宮

猫間川の傍あり 玉造所なり 所系用明天皇 人皇 世二代 かくて聖徳太子の

御父帝より日本紀は推古天皇六年夏四月鵲二喉を難

波の杜小養しむとて其の別母地なりとて攝社末社境内に

多し亀井水田趾蓮如上人祈松とる大樹あり

杉山 森の宮の 此地は金成の藝の方ありて松の大樹繁りし山なり

四面の眺望殊更に風景よき故春暖の頃浪華社貴賤

あはれ来つて遊宴に別て衣更着初年の日の老若群

集ひて最ふとて

秋山

梅白ひ桃さうあうらう都下の
老若あひまゐりて辨當といふ兒
竹筒をかきゆけ風ふあう踊るはう
黄茶となつひ老人風のなまこ見
春草とつむ婦女子などあひひふ
松舟として初日西小かきゆくと
とまり



初七



初六

梅の薬師 杉山の 本尊石薬師境内小梅の大樹多し二月花の

盛る風流士あはれまつく風艶と賞は

豊津稻荷社 梅の寺あり 系神倉稻魂命あはれ人王十一代垂仁

天皇十八年の勅請あり信ふ玉造の稲荷と号は本社の後より

舞臺ありて世訓より東の山く眼前小連うて風景斜る

び凡て世辺と玉造と号とる事ハ神代のむく玉屋命塔

地は新く始めく玉と形らせり所ありと玉造塔 太子

玉造川玉造河木古号小源とる

宰相稻荷祠 豊津の寺あり 信よ真田心とる元和の頃まの田村

紫より有くく社説く宰相山とる小京極宰相俊の陣營

世辺小育より期号くるなる屋一扱まる本殿ハ仁徳天皇と

多あり稲荷神ハ本社の傍小和清は其余未社作多あり畧之

就中三光宮とくくハ奥列青麻ハ在せる神の遥拝所あり

此ハ新誓とからる者ハ中風の病疑と除せる入とて病を原

より病ざりも其疑と脱らん事と成ひくまくと運ぶ後ら

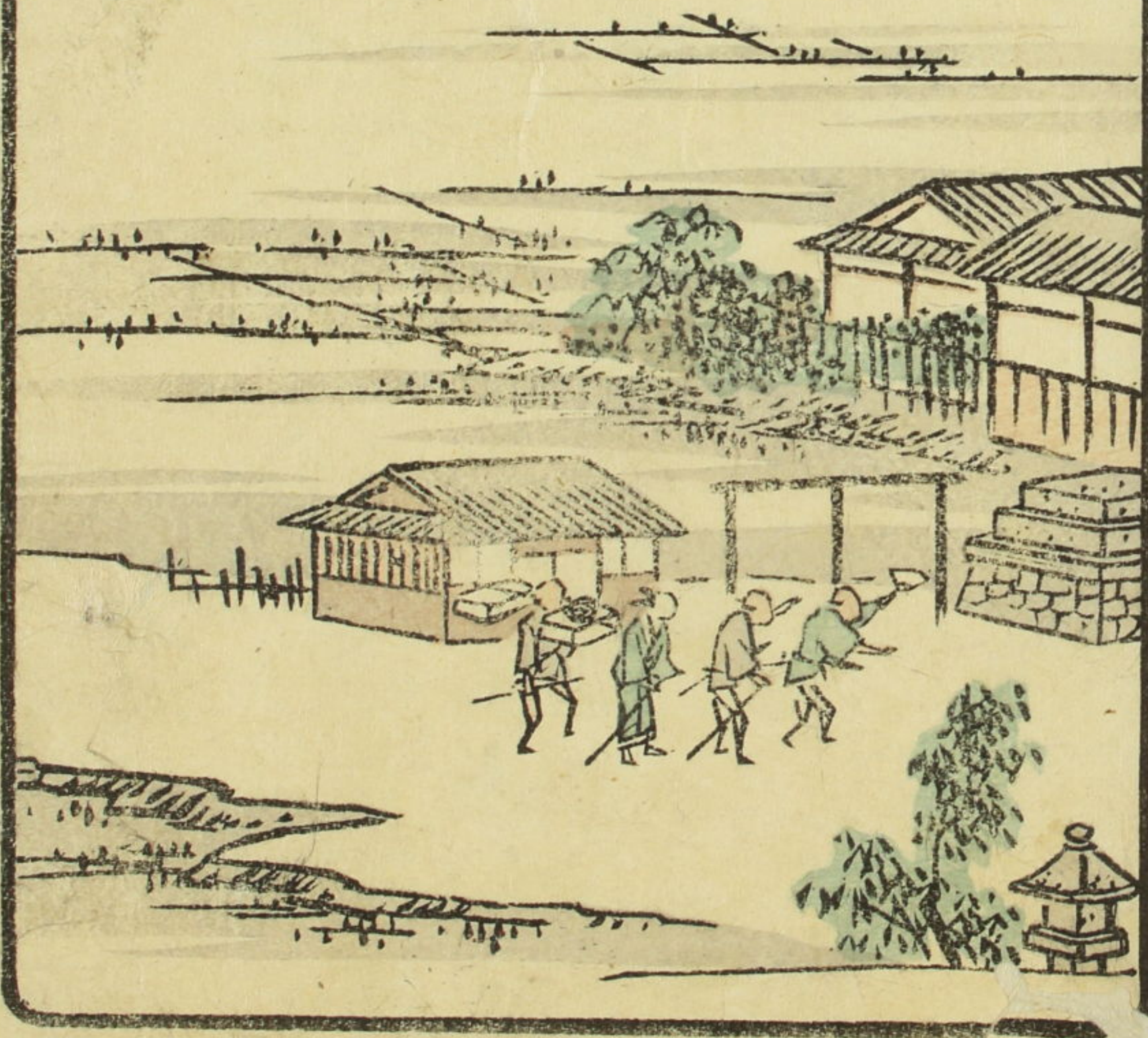
多し凡く此地ハ一准の丘山ありて東の方と見くくせば比叡

三軒茶屋

此地ハ玉造の街端にして
 伊勢系宮大和巡見大峯
 諸ホの送別の場所なり
 左右ハ酒肴をとりし
 茶店あり故不刻ハ号け
 程小弥生の初旬
 より難波菅笠一掃ふる
 連なる伊勢人頭あり



別もの酒肴不詳なり
 あり這入あり或ハ形端ハ
 休むもあつて賑わきて
 言ざりりる
 其上平日とハども亦
 街道の往還されハ強ク
 の通り絶る間あり
 信玄公の毘沙門生駒の聖天
 ホハ月糸の信者ありて皆
 る茶店と休足所と定む



山の高根不續きて漸々南に連り生駒嶺を嶺信貴の山二上
嶽金剛山より葛城の山へまで一眼不見へるやまに比ひ
され光景あり

圓珠菴 東三津嶽 此地に契冲阿闍梨の遺蹟ありて庭中小墓

碑あり碑文に五井蘭列の撰あり 其文師ハ國學と博シ和書

數篇と著りて世に著し知る所あり元禄十四年正月廿五日此小

於る寂以年六十二去る戌年百五十年の忌に當りて風流の

好士追悼の和歌と遠近に勅進して吳郡小倉向られぬ

味原池 小橋村の 一名比賣古曾神の御影池とて古歌に味原の

池味原の堤とて詠あり味原御牧 延喜式

産湯清水 味原池の 大小橋命の産湯の水とて名泉ありて清徹

外不淺き四時ともて酒さるる味原珠は甘味あり五の上り

稲荷社あり五と法藏山とては地を初めは賣古曾社の旧地

ありしが今尚神主の宅に於あり比賣古曾社の是より東の

方小あり跡にけ辺に一園小榊畑ありて孫生の初旬菴の頃より

老翁男女らより群る野徑に元禄に

野中観音

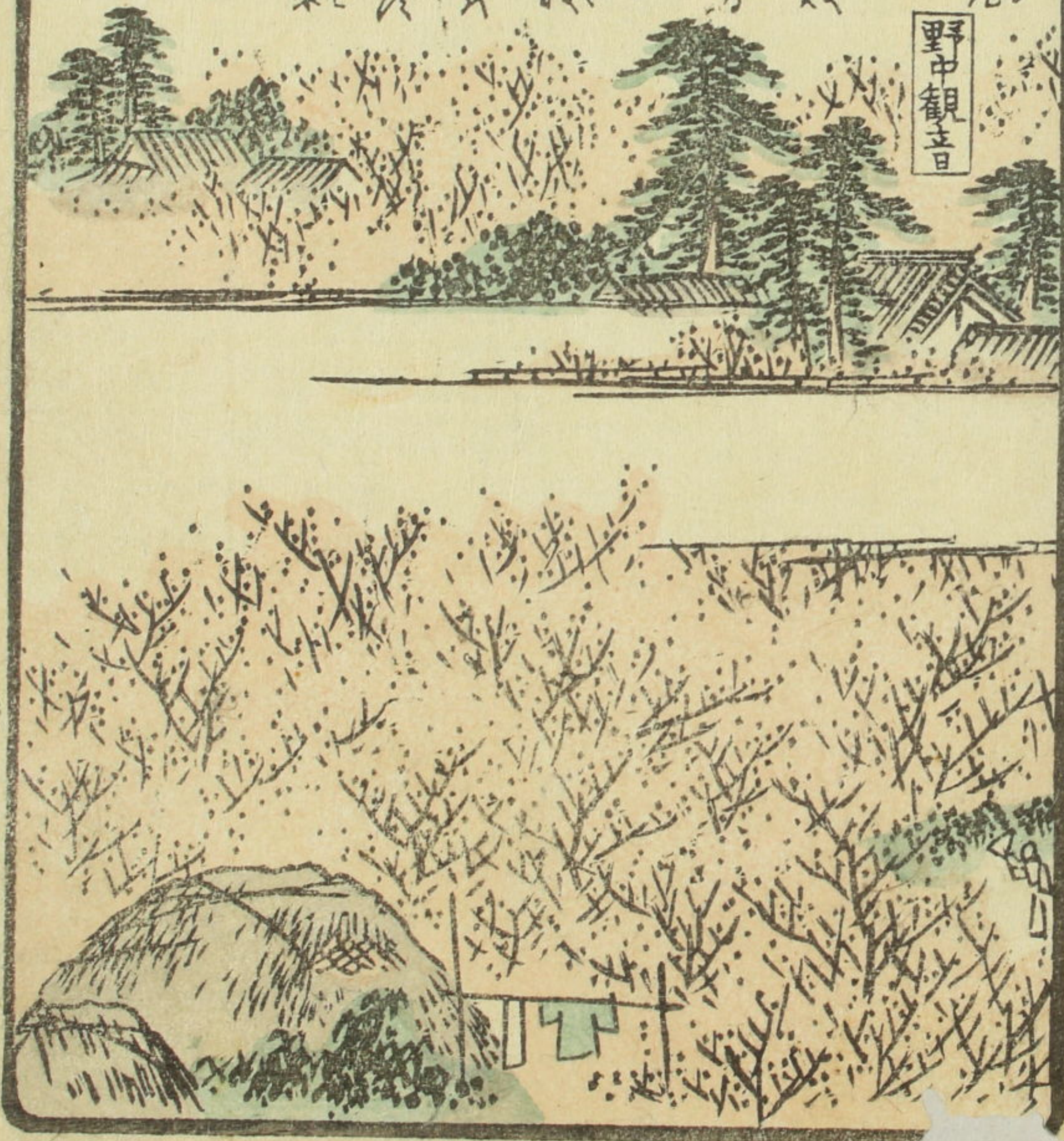
玉造小橋の辺より
 天王寺までの間凡そ
 一畝の桃畑るれば野中
 とつる地へ金々桃化



社
 九
 正

最中よりわひ白ふ花
 の盛るらん天も研る
 光景さうされば物りぬ
 花の下と人のはと休む
 ころねのめい〜おねひ
 つまらぬや靴や花の枝
 うらら〜げ〜る帯〜の
 彼桃源の仙境い〜ま〜
 其一時の業花よ〜千葉
 も延るん花さ〜し

野中観音



寶樹寺



初九日

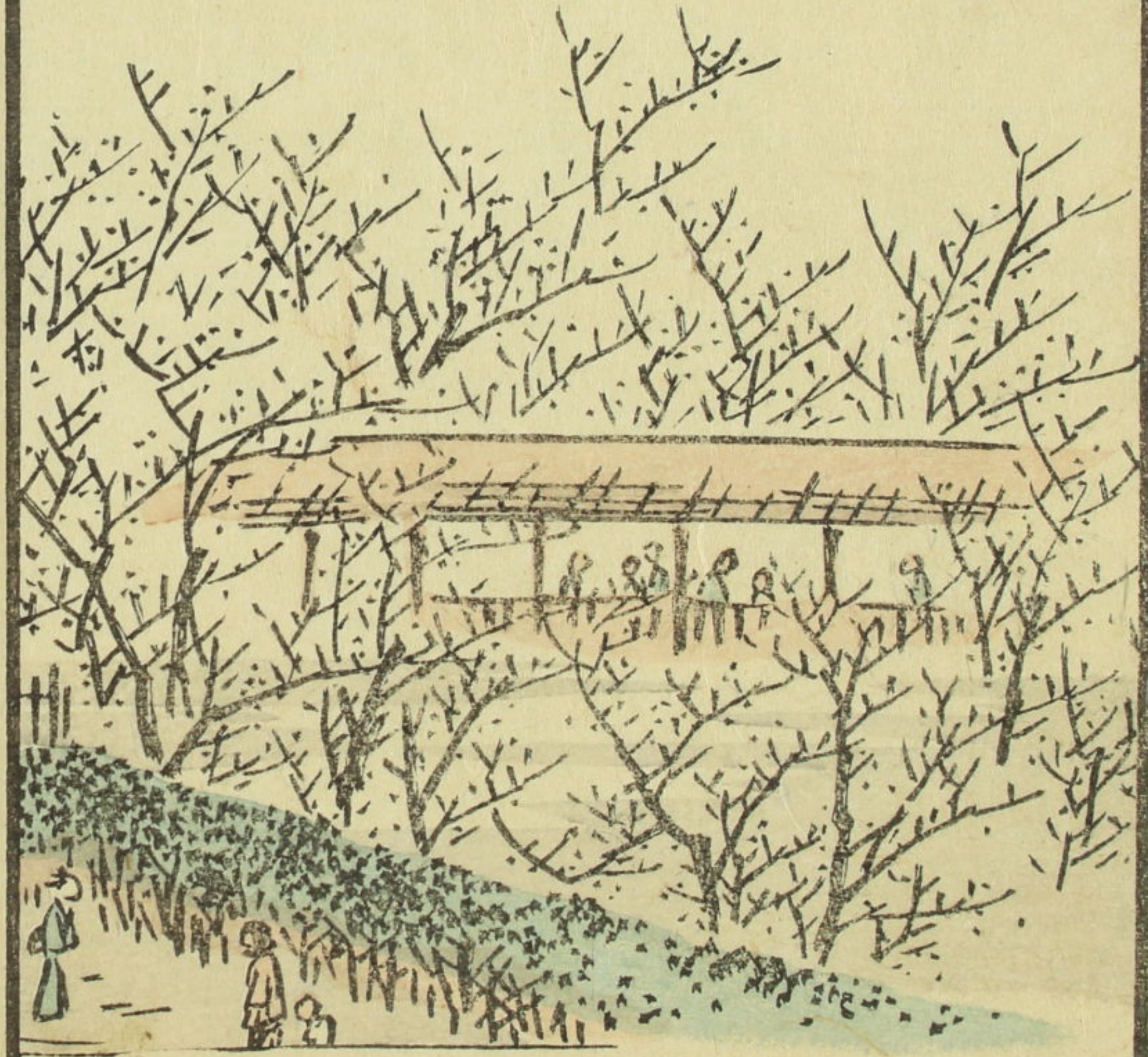
當寺の梅や花の山々
 して東高津ふあり
 本堂の背後方僧坊の
 庭前は楓の大樹数林
 あり紅葉の頃ハ詩哥の
 雅客競ひ来つゝ
 遊樂ハ尚林泉の
 風景と一ハゆめ

眺望



梅屋敷

此地の上の宮より乾の方へ
して生玉馬場前の東へ
あり園中小敷株乃梅と
植つて糸樹下小席を設く
さ程は如月の花は吹雪
清香の方小葉がく道
ゆ人も唯こ過るごと
得びりより風流れ
好士ホひき集り
遊観は又後てふ節と



初六

遊りて長月のそら
花壇とひききて花を
かきさむ多ふ春秋も
美景なる猶地より
此梅中々といつて東郷
亀戸よりあつて世に名
を離しとて
文化初年の頃
これと
換くく斯いなる
初六



初六

野中観音 産後の渡りの 寺と遍明院とつゝ本尊十一面観世音と

和列長谷寺の吳像と同本とて悪七名湯景清の守り本尊

るりより 俗名當田寺と難波寺とつゝ説詳あり

上之官 野中の 所系欽明天皇とつゝ社頭は檜茅萱木数株あり

て春秋美景るれば衆人群集しとて賑し

北向八幡宮 生玉の門前の 天正慶長の年間城中の諸士此處に於て

射羽の藝古とるにようり矢津と初清ととぞ今も五月五日に

流備馬の儀式行はるゝに昔の遺風ありて地名も今も流備あり

とつゝ北向の御城守護の謂ふりと同由

金毘羅祠 八幡の前の 當寺の鎮守ホーとて靈驗ありとて

かりとて老若共のそとび別して毎月十日より遠近より流

人群とるせり本尊の聖観音とて長三尺五寸飛彈内返の

作と安置ありとつゝ

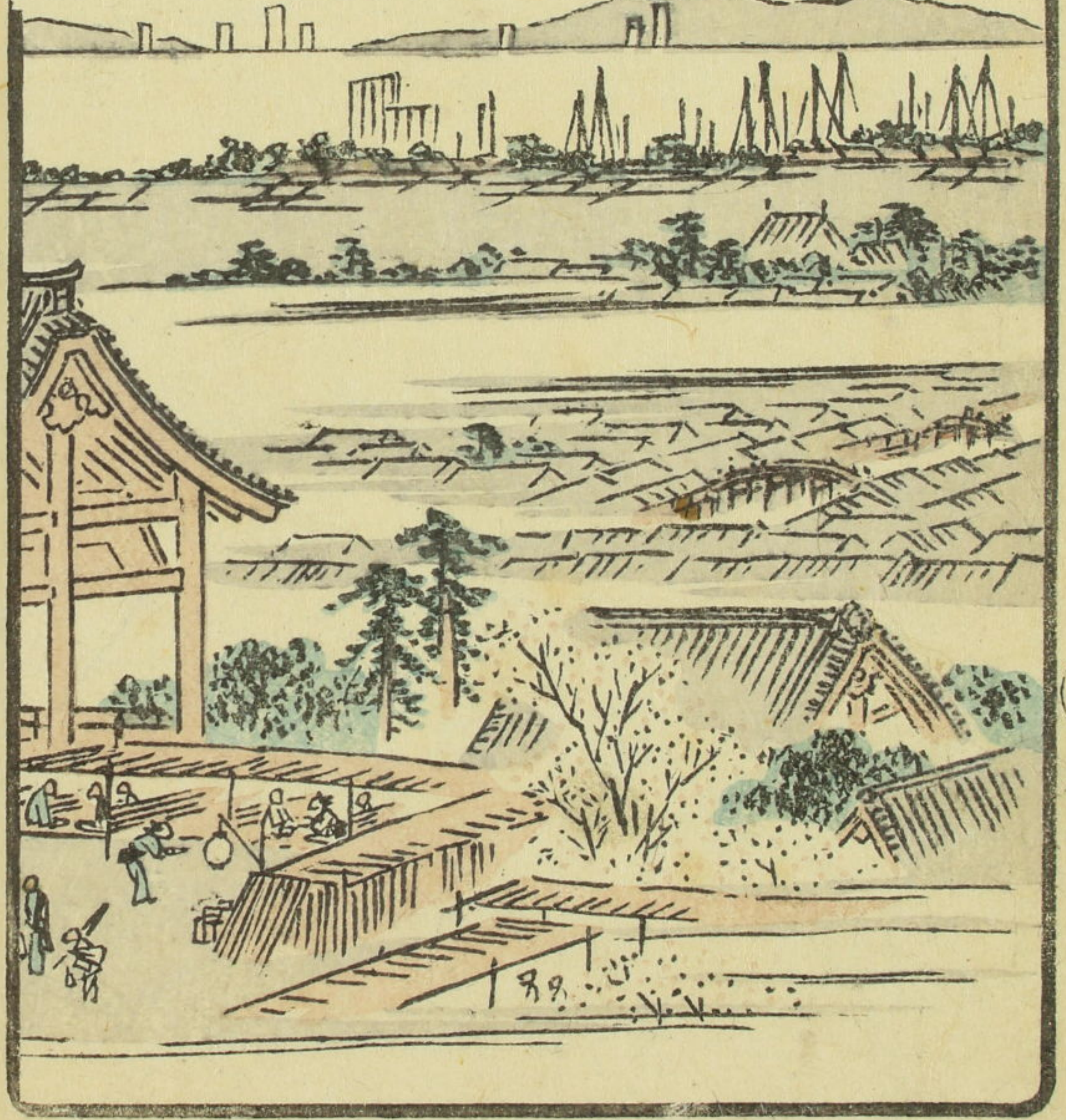
辨財天祠 生玉の前の 傳云ひり海中より出現ありとて吳像ありとて

社頭は蓮池ありとて夏日より紅白の花咲きて美観あり

生龜神社 馬場前の 多分生魂命大國玉命より延喜式

生玉社

本社の後辺の舞臺
 西の方と遙く見ると
 市中の万戸の薨の波の
 びく河口の比柱笋の
 繋るに似し洋々たる
 滄海は千船百船の出入
 白帆の光景けふ類ひる
 眺望とりのし
 又社頭小橋本より弥生の
 幽艶斜るは門前の池
 夏日蓮の花紅白と



まへて咲乱と
 荷葉の白
 四つ小
 芳し



生玉

眞言坂

生玉の社僧ハ貫首南坊と

ちぬ余九院あり故ハ

是と十坊といふ

此坂と上れ 左右

あり寺院あり

悉く眞言宗

ありあり

斯の号け

その一なるがせ

りども大師の

却影堂ありく浪花



社ナチ

大師めぐるのれり

るり就中坂とよる

尤の第一と橋本坊と

りして此寺内ハ秋葉権現

の祠観音堂あり

諸人殊ホマ



乃三

日生國魂二座ト云 社頭小末社許まあり本地堂の本尊と
薬師如来ありて聖徳太子の御作と河由大師堂の本地
堂の尤小末並ぶ歡喜天の宮の北の方にあり迎世本社の後
迎ふ高臺と建宮ありて瞻望一しぬありし

高津社 西高津 所系仁徳天皇ありて往古高臺の皇居の余
風と摸せりありし大宮所の舊地の今の御城の辺ありしが
天正年間豊公其地より府城と築ありより神社とせし
遷しよりいごと境内に撰社末社より高臺の頌碑と

本社の西傍より平安の茶煖彦章甫の撰とる所なりは社
頭ハ道頓堀の東にありて一准の丘ありて遠く眺るは浪花
の市街とありあ川にの出船入舟一瞬の中ふありて風系茅
一の勝地あり鳥居傍より常に遠眼鏡と置て諸人と悦む
しむ糸店の湯豆腐の世に名あり石階下の植木屋あり
四時とも花絶び殊小牡丹の花壇の比類あり美観あり
宮前の石橋と梅の橋とあり流きと梅川と号するハ浪花
津の梅よりこののりぞ此橋の下ハ瑜伽社あり寺と自性院

高津

遠眼鏡屋の云

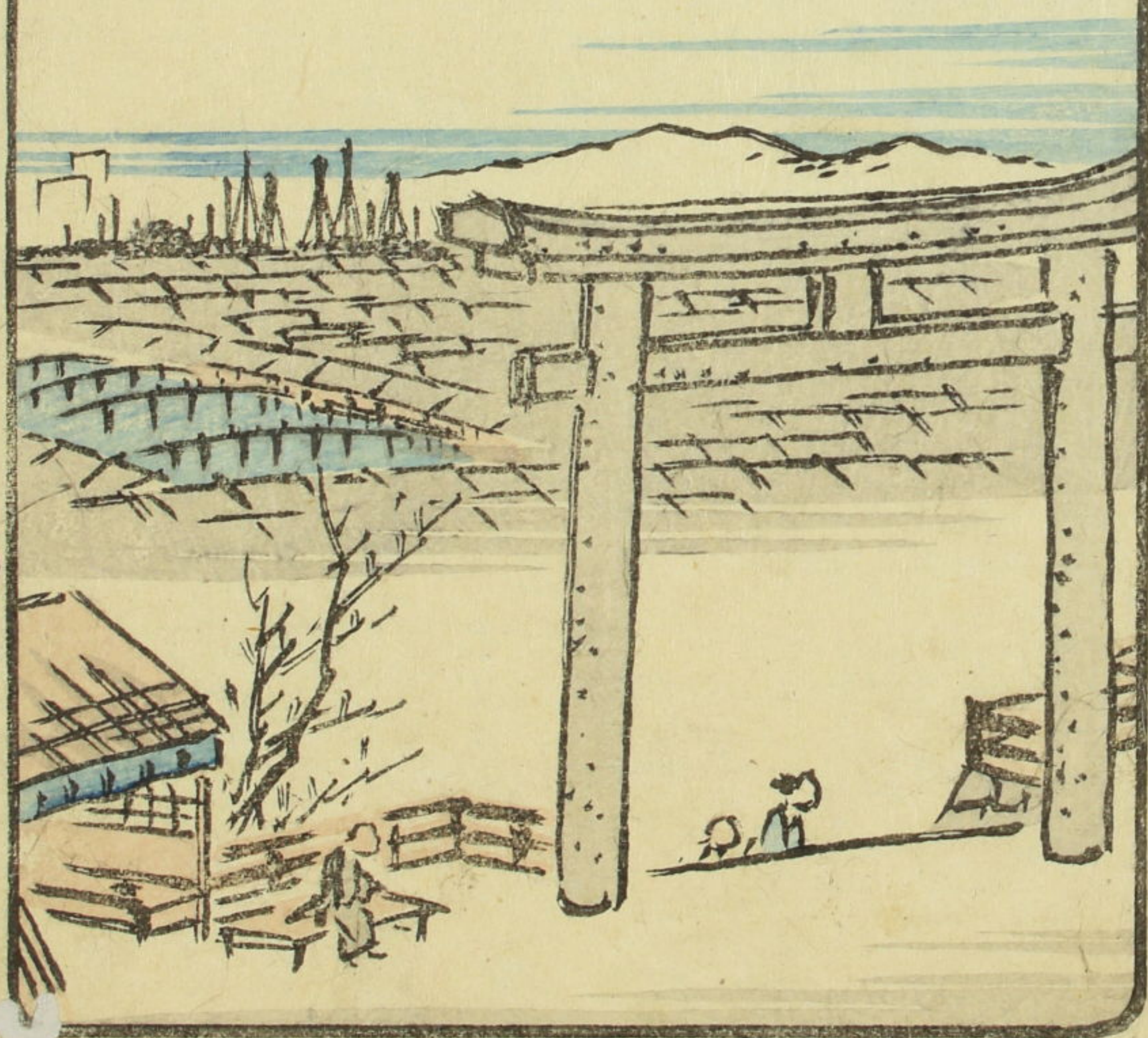
まが最初正面ふとくまきり
 石んが川の傍より芝居
 六つひの織りいへる川
 天保ふ入ふのゆり
 衣へ摩耶山武蔵山甲山
 あり町く東西の御堂丸い
 るんば鉄眼今宮のそびと
 木津川口千本松の風景



津島より傾産の浦へ
 うる千巻のるく声も
 耳へあてられがきき
 余り物ごめめの上より

さゆといえど夏恵の
 あらひおきひくし風あ
 一として二おりの後や
 きん

おのけふ名をきき家の
 申しぬいきやをね
 きんはるひより
 産のうらぬ



えいこうきん 三所の観音堂金毘羅祠あり

頬焼地藏尊

谷町下地蔵坂の角
専修院の寺内あり

常尊の慈覚大師の作かし

て往昔婦人の命ふかり焼鐵の釜と救つて多ふ靈佛あり

委くハ縁記見へり故ふせ身代頬焼の地藏菩薩と

賞し常に清人間あり願ふ是験ありとぞ

又此寺の東隣にて領生寺といふ浄土宗の寺あり此寺内小

大樹の老松あり往古寺院建営の時起誓といふ住持の靈

妻と誓ひて植る所とて今益々繁茂せり妻の形其阿集見へり

又此東向ふ妙法寺といふ日蓮宗の寺院あり世々も大樹の

松ありて境内は繁茂し尚門外は松のむらり其美観ありとぞ

尾上言妙の松も勝らんとて白幹圍二丈二尺枝数九十五三丈九尺

余往東西十丈七尺全南北八丈九尺日野資枝公の御歌あり畧之

茶湯地藏

農人捨てり百間
長倉の角あり

石像ありて長二尺許初念此者茶湯と

供じ且茶湯と清く蒸導ふ加へ或ハ願ゆる所不塗ハ必らば

平愈はといふ別て乳の出る婦人これと喫し月代と嫌ふ

小児これと塗ハ直ふ其験ありとぞ

編輯

鷄鳴舍曉晴翁



畫圖

案川半山



備筆

鎌田醉翁



○此書の遠近の旅客流気遊覧の便宜を本とて、此の故郷の家土産にとて、原未其行方の料小とて荒まゝ名宗と著し、行程許多るれば一日よ歩行順弦とつゞき、一巻とすぬきど行程許多るれば一日よ歩行、かゝれば高麗橋より始め天満川等おとび橋の支綱と高御城に、迎りふりまじり一日の遊観事たゞ一而して又の日玉造の迎りよるゝま田心味原池産湯橋中、及び生玉を津の迎りまでと一日として可なり、為次の日此順弦の第一篇小洋ふ著し

安政二乙卯年四月發行

東之條通市音所

吉野屋仁多所

江戸日本橋通武丁目

山城屋佐五所

大坂心富橋筋小之右所

河内屋甚五所

書林

